

タガメの記おく

ぼくは、東京で働くようになってから、毎年、五月の連休は自分が生まれ育った町に帰って、実家で過ごすようにしている。

今日はしばらくぶりに、自分が通っていた小学校に行ってみることにした。実家からは歩いて十五分ほどだ。

（だいぶ景色が変わったな。）

ぼくが小学生のころは、川ぞいの道の両側には畑や水田が広がっていた。でも、今はたくさん建物が並び畑や水田はわずかしかない。駅に近くて便利だから、家がとてもふえたのだ。新しくできたコンビニエンスストアのわきの路地では、あたたかい日差しを浴びて、子どもたちが楽しそうになわとびをして遊んでいた。

川ぞいの道から右に外れて坂道を登っていくと小学校だ。

坂道の左側には、はばが三十センチメートルくらいの水路がある。水路をのぞくとすっきりかわいていて、だれかがすてたのか、おかしなふくろとペットボトルが落ち



ていた。

（そうだ。この水路すいろだった。……）

ぼくの頭の中は、小学校三年生の五月のあの日にもどっていった。

学校から帰る時はいつも徹とわろと恵めぐみがいっしょだった。三人でこの坂道さかみちを歩いていると、徹とわろがとつ然ぜんびっくりしたような声を出した。

「タガメだ。」

「え、タガメ。」

ぼくと恵めぐみは、水路すいろをのぞきこんだ。すると、かまのような形の大きな前足を広げた、五センチメートル以上もあるタガメが、ゆっくりとした流れながの中で水草につかまっていた。

すると、徹とわろが、こうふんをおさえるように小声で言った。

「タガメは、大きなこの手で魚やカエルをつかまえるんだ。明るい時はかくれていて、夜になると動くから見つけにくいってお父さんが言ってた。本物ほんものを見たのは初めてだよ。」



ぼくは手をのばして、タガメをつかまえようとした。
すると、徹とおるが、

「やめろよ。タガメは大切な生き物ものなんだ。それに、
さされると大変たいへんなことになるよ。はりみたいな口
を相手あいての体に入れて、とかして食べちゃうんだ。」

と、小声のまま、しかし、強い口調で、ぼくに注意ちゅういし
た。ぼくは思わず手をひっこめた。

「ちょっとこわい感じかんね。」

と恵めぐみが言うと、徹とおるは、

「タガメは強そうに見えるけど、とっても弱い生き
物ものなんだ。水がよごれると生きていけないんだよ。」

と、つぶやくように言った。

ぼくたち三人は、まるで時間が止まったように、だ
まってタガメを見つめていた。タガメは、不思議ふしぎでい
っぱいだった。



どのくらい時間がたっただろう。恵が、

「そろそろ帰ろう。」

と言うまで、動くことをわすれていた。

その日から、この道を通るたびに水路を見たが、タガメには一度も出会えなかった。

ぼくは、かわいた水路をながめながら考え始めた。

（日本にタガメがいなくなるのが心配されていると聞いたことがある。金魚を食べるから、悪いやつだと、人間が勝手に決めつけていた時もあったようだ。タガメが死ぬような所をへらし、水をよごしてタガメが生きていけなくなるようにしたのはわたしたち人間だ。……）

あの時、ぼくたちの目の前にあらわれたタガメは、そのことを伝えたかったのではないだろうか。タガメは、ぼくたちに語りかける。

「ぼくは、君たちがしてきたことをよく知っている。君たちはこれからどうしていくんだい。」

ぼくは、水路に落ちていたおかしのふくろとペットボトルを、そっと拾い上げた。

